

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 平成30年 国際交流旅費補助による出張報告

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-07<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00001490">https://doi.org/10.57529/00001490</a>                |

## 平成30年 国際交流旅費補助による出張報告

### ◇学会出席・発表目的による出張者（1～5）

| 掲載順 | 出張者                | 出張期間               | 出張先                        |
|-----|--------------------|--------------------|----------------------------|
| 〔1〕 | 福池 秋水<br>博士課程後期3年  | 平成30年8月23日～8月26日   | チュラロンコン大学（タイ）              |
| 〔2〕 | 源 園江<br>博士課程後期2年   | 平成30年9月5日～9月13日    | ウッタラカンド州立ドゥーン大学（インド）       |
| 〔3〕 | 伊藤 新之輔<br>博士課程後期2年 | 平成30年9月5日～9月13日    | ウッタラカンド州立ドゥーン大学（インド）       |
| 〔4〕 | 朱 大江<br>博士課程前期2年   | 平成30年10月4日～10月8日   | マラヤ大学予備教育部（マレーシア）          |
| 〔5〕 | 半戸 文<br>博士課程後期3年   | 平成30年10月12日～10月15日 | 中国社会科学院近代史研究所、武漢大学歴史学院（中国） |

### ◇研究調査目的による出張者（6～9）

| 掲載順 | 出張者                | 出張期間               | 出張先                              |
|-----|--------------------|--------------------|----------------------------------|
| 〔6〕 | 早田 ひかり<br>博士課程後期1年 | 平成30年8月8日～8月15日    | フランス国立図書館他<br>（フランス・イギリス）        |
| 〔7〕 | 田中 彩<br>博士課程前期1年   | 平成30年9月3日～9月5日     | ナショナル・ミュージアム、プラナカ・ミュージアム（シンガポール） |
| 〔8〕 | 國嶋 博子<br>博士課程前期2年  | 平成30年9月5日～9月12日    | オクラホマ州タルサ市、グラス日本語補習校（米国）         |
| 〔9〕 | 孫 政政<br>博士課程後期3年   | 平成30年12月16日～12月21日 | 南台科技大学、厦門大学<br>（台湾・中国）           |

## 【1】福池 秋水

本出張の主な目的は、タイ・バンコクのチュラロンコーン大学にて開催された「タイ国日本研究国際シンポジウム2018」に参加し、口頭発表を行うことであった。口頭発表は、『漫画キャラクターの話し言葉におけるラ行音の撥音化』と題して行った。本シンポジウムの副題は「メディア時代の日本研究」となっており、自身の研究内容の発表の場として適していると考えた。

発表内容は以下の通りである。首都圏方言の特徴の一つに、「わからない」が「わかんない」になるというようなラ行音の撥音化と呼ばれる現象がある。本研究では、このラ行音の撥音化を取り上げ、漫画作品『きのう何食べた?』（よしながふみ、講談社、2007年～連載中）を題材として分析した。そして、今回分析対象とした登場人物が、上下関係ではなく、その場の心情や人間関係によってラ行の撥音化を使い分けている可能性があることを示した。以上のことから、日本語教育への提言として、撥音化や縮約形に関しては、一概に「くだけた場面で使う」という説明では不十分であり、使い分けの情報について、文脈や場面を添えて提示することが効果的ではないかと述べた。

発表では、聴衆から多くのコメントをいただき、たいへん有意義なものとなった。とくに日本語非母語話者の方からは、学習者にとって参考になる情報なので、ぜひ対象作品をふやして研究を続けてほしいというコメントをいただいた。

自身の発表以外には、基調講演と口頭発表を聴講した。基調講演は文学がテーマであったが、「日本文学」ではなく「日本語文学」という用語が用いられていた。「アイヌ文学は日本文学か、世界文学か」という問いは、日本語教育に携わる人間としてとても考えさせられた。

口頭発表では、日本語教育の分野のものを聴講した。アカデミック・ライティングの指導に役立つものが複数あり、今後の教育実践に役立ちそうだと感じた。

今回の出張では、タイの日本語学習者と接する機会もあった。主催の国立チュラロンコーン大学の日本語講座は、タイの高等教育における日本語教育の最初期に開設された長い歴史を持つことで知られている。今回の会場案内は同学科の学生が担当しており、その中の1人と話すことができたが、話す能力が非常に高いと実感した。

また、シンポジウムの前日には、タイの私立大学であるタイ商工会議所大学を見学することができた。タイ商工会議所大学の日本語学科は、タイ国内で日本語専攻課程を持つ8つの大学のうちの1つである。この大学の学生とも話せたが、日本語を学ぶ熱意と礼儀正しさが印象深かった。

国際交流基金の直近の調査（2015年）によれば、世界の日本語教育者数の中でタイは第

6位を占めている。街中でも日本語の表記や日本の商品、日本語を話す人々を数多く目にした。また、語学学校内の書店では、タイの高校生向け初級総合教科書として改訂版が出版されたばかりの『あきこと友だち』を購入した。

今回の発表で漫画を題材とした理由の一つは、海外での漫画の人気の高さから、漫画を利用した日本語教育への連携を見据えていることがあった。海外で実際に日本語学習者や日本語の使用を目にすることができ、今後の研究に向けて大きな励みになった。

今回の国際交流旅費補助により、このような貴重な機会を与えていただいたことに感謝いたします。

参考資料：国際交流基金『海外の日本語教育の現状 2015年度日本語教育機関調査より』

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey15.html>

(2018年9月26日取得)

## 【2】源 園江

発表テーマ：インドにみる沖縄の神観念

### はじめに

2018年9月5日から13日まで、文学科伝承文学コースのインド日本比較文化国際会議に参加した。「12億の人口」「仏教発祥」の地というほどの知識しかなかった報告者にとって、圧倒され、啓発され、また、普遍を見出す9日間であった。

インディラ・ガンジー国際空港に着いて第三ターミナルを出ると、長い通路の天井壁に28手の印相「ムドラー」のオブジェが並び、「釈迦生誕の地」との感慨を強くした。しかしその後、帰国最終日に訪れた国立博物館の仏像まで、仏教的なものにはほとんど出会うことがなかった。

平成29年9月公表の外務省 (<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/india/data.html>) によると、インドの宗教信仰人口の配分は、次の通りである。

ヒンドゥー教徒79.8%、イスラム教徒14.2%、キリスト教徒2.3%、シク教徒1.7%  
仏教徒0.7%、ジャイナ教徒0.4% (2011年国勢調査)

12億の人口の80%がヒンドゥー教徒ということは、国教ではないとはいえ、およそその倫理と規範に則って、国政と外交と文化が創造され運営されているのではなかろうかと推察される。ヒンドゥー教とはどのような宗教であろうか。また、報告者の研究テーマである沖縄の神観念につながる要素および普遍性があるのか。今後の考察のいとぐちとして、見聞した中から、特に多くの示唆を与えられた「サイ・マンディル寺院」および樹木信仰「バニヤンの木」について整理し、覚書とする。

### 1. サイ・マンディル寺院 (Shirdi Sai Baba Temple)

サイ・マンディル寺院は、インド全土において、ヒンドゥー教徒、イスラム教徒などの宗派を超えて崇められている、「シルディのサイババ (1838年頃生誕～1918年10月15日没)」別名「サイババー世」を祀る寺院である。なお、日本で知られているアフロヘアのサイババは、「サティア サイババ (1929生～2011)」と呼ばれ、シルディのサイババから「自分の身体が減して8年後に生まれる」と予言されていた人で、「サイババ二世」とも呼ばれている。サティア サイババは生前に、さらに「自分が減した後三世としてプレーマババ」が現われるだろう」と予言したと言われている。

寺院の前で全員が履物を脱ぎ、水道で手を浄める。供物として、マリーゴールドの花、ココナツ、小さな西洋梨、麦粉の菓子等々が売られている。供物は必須ではないが、インド人に見える人々の多くは捧げるように籠をかかえて寺院に入って行く。建物のあちこちに、さりげなくシルディサイババの写真が架かっている。

寺院の中央祭壇に赤い衣をまとい、マリーゴールドの花輪を掛けたシルディサイババの大きな座像がある。オレンジの衣をまとった僧が座して行列の参拝者から供物を受け取って一部は返し、列の一人一人の額の眉間に赤い「ビンディ」の印を付ける。祭壇の横では祈りのバジャンが高らかに歌われている。その奥に、シルディサイババのお墓マハーサマーディを象徴する棺があり人々が額づく。室外に出て、サイババの生涯を語るステンドグラスが飾られた聖殿を時計と同じ方向に三度廻る。

聖殿の外に出たところにレンガ造りの施設があり、赤々と火が燃えていた。ドゥーン大学のラヴィ教授が、「この『火』はシルディサイババがずっと燈し続け、調理をしていた火で、その『灰』を人々に分け与え、さまざまな奇跡がおきていた。『火』はとても重要で深い意味を持っている」と説明された。

インドにおける火の信仰に関して、鈴木秀夫は「紀元前3500年ほどに、中央アジアの乾燥地帯で遊牧していた騎馬民族であるアリア人が侵入して火を使って森林を拓き、農耕生活を行った。アリア人の残した文献のなかには、湿潤および森林との戦いを示す文章が多く、その戦いの結果として生じた生活空間にとって、火の神の果たした力の大きかったことを諸所に表明している」『森林の思考・砂漠の思考』初1977・2000、76（日本放送出版協会）と述べている。

また、1 m四方に高さ2 m程のパイプの柱が立ち、バナナの葉が添えられ、上方に結ばれた4本の竿には透きとおった赤地のスカーフのような布が一辺に五枚になるように規則的に翻る囲いがあった。その中の地面に四角い枠があり、黒炭が溜まっている。ネルー大学のチョハン教授が「柱は本来『竹』であり、バナナの葉は聖なる葉である。ここでは日本という『護摩』が炊かれる。それによってすべて浄められる」と説明された。護摩の前にはレンガに彫られた「卍」が置かれていた。この寺院では、沖縄および日本の神観念に共通する多くの示唆を与えられた。まとめるとおよそ次のような事項である。

#### 1. 寺院に入る時、履物を脱ぐ。

伊波普猷は琉球の祭祀に関連して「神の前では王も簪かんざしを外し裸足になった（伊波普猷「一五世紀末の南島」『をなり神の島1』1973.99平凡社）と述べる。また、与論島のシニユグ祭りの「家打ち祓へ」に、家の内外を裸足で祓う儀礼が残されている。

2. 拝礼の前に水道で手を洗う。

日本の禊と同じ観念であり、手水舎といえる。

3. 供物を捧げる。

沖縄や神社神道においても、神酒や米などの供物を捧げている。

4. 祈りの「バジャン」が歌われる。

沖縄では神祭りの神歌が発達している。神社神道においても雅楽がある。

5. 「火」が崇められる。

沖縄で最も重要なのは「火の神」である。沖縄の御嶽や各家庭には、三石を組み合わせた火の神が祀られていることが極めて多い。

6. 「灰」が神聖視される。

沖縄では嫁入りに際し、実家の香炉から「灰」を分けて行き、嫁ぎ先の「灰」と合わせて奉る。

7. 四角の竹の柱とバナナの葉。

与論島のシニユグ祭りの斎舎「サアクラ」の原型にきわめて近い。

## 2. バニヤン (Banyan Tree) 樹木信仰

バニヤン (Banyan) はサイ・マンディル寺院の概道沿いにあった。インド原産でベンガルボダイジュとも呼ばれ、インドでは長命と繁栄の聖木とされている。高さ20~30m、枝葉の広がりやうに20mを超え、中でも最も目を引くのは、横に広がる幹から地面に向かって真っすぐ伸びるヒゲ状の気根である。気根は地面に達すると次第に太くなり樹皮が発達して幹となって親木を支えさらに枝葉を広げていく、と同時に、元の親木はしだいに朽ちて空洞化していく。

太い根幹の脇に、オレンジ色の屋根のとがった祠があり、聖水の壺と香炉のようなものが置かれていた。手の届く枝には、赤やオレンジ色の布が結ばれ、根元には水がめと供物が捧げられていた。ネルー大学のチョハン教授はつぎのように話された。

オレンジは「火」の色です。何でも純粹にきれいにする、浄らかな色です。ですからこの色でお寺を塗っていますし、僧侶の衣もそうです。また自分の心の悪とか誘惑や欲望など、全部捨て去ってきれいにする、何も持たない全部捨てて純粹になるという色です。初めて日本に行ったとき、鳥居が同じ色でびっくりした。

バニヤンの木は、沖縄にふんだんに見られ、家々のまわりに防風林として繁茂しているガジュマルであった。インドが原産地ならば、琉球が東アジアの海洋交易で栄えた時代、あるいは遡って、南洋から黒潮の海流と季節風に乗って筏や丸木舟でやってきた古代の人々が伝えた木であろうかと想像された。

沖縄の文化圏でも、ガジュマルは聖なる樹木である。沖縄の御嶽はガジュマルに取り囲まれ、もしくはガジュマルそのものが神木であったりする。また、与論島で神棚の花瓶に挿すのは、古くはガジュマルの枝であった。そして現在でも、祖先祭祀では、ガジュマルの枝に紙垂を付す。

## おわりに

インドと沖縄に共通する神観念は「自然崇拜」と「祖先崇拜」を根底に持つということであろう。「シルディのサイババ」は実在した生身の人間であることをだれもが周知し、宗派や民族を超えて崇められている。また、ヒンドゥー教において現在最も知られている神は「シヴァ神」であろう。シヴァ神は首に蛇を巻き、額に第三の目を持ち、灰を身体に塗り、水を欲する。聖者であると同時に、妻と二人の息子を持つ一家の主でもある。破壊と再生を司る最高神とされ、日本では大黒天や不動明王として、仏教の中に位置している。

インドの深淵な神観念は複雑で、容易に理解できることではないものの、報告者の研究テーマである沖縄の研究においては、避けて通ることのできない、あるいは重要な考察のいとぐちが示唆されていると思われる興味深い世界であった。今後、一つ一つを検証し、照らし合わせていくことの重要性を実感している。



### 【3】伊藤 新之輔

第6回インド・日本比較文化研究セミナー（現地題：Cultural and Literary Research in India and Japan）について次の通り報告する。

## 9月7日・8日 第6回インド・日本比較文化研究セミナー

### （1）セミナーの概要

第6回インド・日本比較文化研究セミナー（現地題：Cultural and Literary Research in India and Japan）では、両日を通してインド・日本両国の研究者や学生が講演・研究発表を行った。1日目には2名の基調講演と13名の研究発表が、2日目には16名の研究発表が行われた。

日本側からは小川直之教授（「日本の盆行事と先祖祭祀」、飯倉義之准教授（「口承文芸研究の現代的課題」、米屋陽一氏（「神になった人々を追う—神田祭・三社祭・身近な神さまと口承文芸—」）が講演を、大学院後期課程の伊藤新之輔（「静岡県における盆花」、源園江（「沖縄の死生観—蘇りの水—」）、大学院特別研究生の鈴木慶一（「マブイゴメの修法と靈魂観」、清野知子（「小栗判官物語—説経正本集を中心として—」）が研究発表をし、山東正昭氏が昔話の語りを披露した。また、昭和女子大学の大学院生1名と、筑波大学のインド人留学生も発表した。

インド側からは会場である Doon University の学生や教員をはじめ、University of Delhi、The English and Foreign Languages University、Jawaharlal Nehru University、Mody University of Science and Technology、Banaras Hindu University など、インドの多くの地域から大学院生や教員が集まった。

日本側は日本民俗学に関する発表が主であった。インド側は日本文化や日本文学、日本語学、日本語教育、ドイツ文学、中国文学、インドの文化に関する発表など、分野が多岐にわたっていた。今後のセミナーでは日本側からも文学や史学、宗教学などの多分野の研究者が参加することでより充実なセミナーになることを期待したい。

### （2）インド側の研究発表

研究発表からは比較文化的な視野が広まった。例えば、インドのパンチャタントラと日本の民話に登場する動物の役割の異同を知ることができた。加えて、インドで日本文化がどのように理解されているのかも知ることができた。小川教授や飯倉准教授はインドの学生に対して研究のアドバイスをし、インドの研究者や学生からはインドで見られる類似の

伝承を教えてくださいなど、両国の研究者や学生が互いに知識を提供し、研究の参考にすることができた。

### (3) 自身の研究発表について (「静岡県の盆花」)

#### 〈発表の目的〉

日本において現在最も盛んに行われている先祖祭祀は盆行事だといえる。盆は、かつて旧暦7月13日から7月15日の3日間行われたが、現在多くの都市では新暦の7月13日から15日、地方では月遅れの8月13日から15日に行なわれている。「帰省ラッシュ」が各地の交通機関で頻発するように、現在でも大切にされている先祖祭祀の行事である。

盆には様々な飾り物が用意されるが、その一つに盆花がある。多くは山から採ってきたもので、墓に供えたり、盆棚や門口に飾ったりする。発表では、静岡県内で用いられる盆花に注目し、盆花の伝承の具体的な内容とその分布の特徴を明らかにした。

#### 〈発表内容とこれからの課題〉

静岡県下の盆花を比較研究の指標に設定すると、天竜川東岸と上流域・狩野川流域に見られる〈コーバナ系〉、天竜川東岸から大井川西岸下流域にかけての地域に見られる〈ススキ・ミソハギ系〉、大井川上流域に見られる〈トチナ系〉、富士川流域に見られる〈オミナエシ系〉と、盆花の地域差を明らかにすることができた。盆行事は非常に多様な習俗が伝承されており、何を比較の指標とするかで描くことのできる分布のあり様に変化する可能性はあるが、引き続き比較の対象を周辺地域に広げていきたい。

加えて、旧富士郡や駿東郡では、盆花を生けた竹筒を大量に持参して複数の墓に供えることや、迎え火や送り火をする場に花を立てることが盆行事のなかで伝承されている。加えて、富士宮市旧柚野村での調査データから、旧富士郡一帯では墓での花立てが墓にミニ塔婆を供える形式に変化していったことを確認できた。

そして、山から盆花を採ることが祖霊を迎えることを意味することや、盆花を庭先に立てることが祖霊を迎えたり送ったりする機能を持っていることを指摘した。また、詳細な比較研究により、静岡県下には墓参をし、新仏・先祖・無縁仏の霊の区別をするという関沢まゆみが示した第2類型と第3類型の亜型にあたる伝承が確認できた。

日本の年中行事では、盆行事のほかにも旧暦4月8日の卯月八日でも盆と同じように山から花を採ってきて庭先に花を立てる。「花を立てる」という行為が意味することを今後とも考察していきたい。

参考文献

- ・ 関沢まゆみ 「「戦後民俗学の認識論批判」と比較研究法の可能性—盆行事の地域差とその意味の解釈への試み—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一七八集 2013年3月
- ・ 国立歴史民俗博物館 『日本各地の盆行事と葬送墓制の最近の変化』 2014年6月
- ・ 関沢まゆみ 「民俗研究映像「盆行事とその地域差」——盆行事の民俗史／火葬化の現在史——」『盆行事と葬送墓制』吉川弘文館 2015年7月
- ・ 小川直之 「列島の民俗文化と比較研究」『盆行事と葬送墓制』吉川弘文館 2015年7月

#### 【4】朱 大江

発表会は、主に基調講演、アイデア広場、ポスター発表、口頭発表四つの部分があった。発表者の中に、マレーシア、日本、ベトナムの日本語教育現場に活躍している日本語教師だけではなく、私のような日本語教育を研究している院生もいた。

私の発表は、ポスター発表だった。自分の発表の要約を以下に載せる。

引用句「～と考える／と考えられる」におけるコピュラの表示と非表示について

—朝日新聞の社説を資料として—

The Study of Latent Copula in Quoted Clauses [tokangaeru/tokangaerareru]

—Base on the Asahi Shimbun Editorial—

### 1. 背景

引用句の内容が名詞述語文や形容動詞述語文で表されるものである場合、コピュラを用いるかどうか迷う日本語学習者が少なくない。特に、上級の日本語学習者が日本語で論文を執筆するときに、「～と考える／と考えられる」のような文型の前にコピュラを使用するかどうか迷うことが多い。

本研究は、書き言葉の引用句内におけるコピュラの表示・非表示に関する条件を明らかにすることを目的とする。

### 2. 調査資料と調査方法

具体的な研究方法として、まず、朝日新聞データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』の検索可能な1985年～2017年の33年間の社説22646篇を全部拾い出して、GREP機能付きの検索ソフトサクラエディタを用いて用例を収集して検討し、各文型のコピュラの非表示率を明らかにする。コピュラの非表示率について、文における位置や、前接する語の品詞などの視点から考察を行った。

以下の検索ワードと正規表現を使って検索を行った。

漢字 + コピュラ + と考える : [一 - 齣] (である | だ) と考える。

漢字 + と考える : [一 - 齣] と考える。

### 3. 調査結果

「～と考える／と考えられる」のコピュラの非表示率を表1、表2に示す。

表1 「～と考える」

|      | 文中  | 文末  |
|------|-----|-----|
| 出現例  | 47  | 106 |
| 非出現例 | 162 | 57  |
| 合計   | 209 | 163 |
| 非出現率 | 77% | 35% |

表2 「～と考えられる」

|      | 文中  | 文末  |
|------|-----|-----|
| 出現例  | 1   | 2   |
| 非出現例 | 16  | 4   |
| 合計   | 17  | 6   |
| 非出現率 | 94% | 67% |

形容動詞・名詞に接続する「～と考える」のコピュラの表示と非表示率を表3に示す。一方、「～と考えられる」におけるコピュラの表示の3例は全部形容動詞である。

表3

|      | 文中       |           |     | 文末   |          |          | 合計 |
|------|----------|-----------|-----|------|----------|----------|----|
|      | 表示       | 非表示       | 合計  | 表示   | 非表示      | 合計       |    |
| 形容動詞 | 23 (30%) | 54 (70%)  | 77  | 形容動詞 | 45 (58%) | 32 (42%) | 77 |
| 名詞   | 24 (18%) | 108 (82%) | 132 | 名詞   | 61 (71%) | 25 (29%) | 86 |

### 4. 考察

① 三枝 (2001) は、「引用句」の中に「だ」がなくてもよいが、書き言葉では省略しないことも多いと指摘している。しかし、表1と表2から見ると、三枝 (2001) の指摘と合わないところもある。文における位置と自発形であるかどうかはコピュラの非出現に影響を与える。

② 文末に現れる「～と考える」の前が名詞である場合は、引用内容が主に書き手の「判断内容」である。「だ」を表示した方が書き手の主張を強く伝えられるだろう。

c. 回り道だが、人々の支持を得る確実な道だと考える。

文末に現れる「～と考える」の前が形容動詞である場合は、引用内容が主に書き手の「思考内容」である。コピュラの非出現に影響する要素は「引用句の主語が第一人称かどうか」と「書き手の態度」だと考えられる。主語が「われわれ」「私たち」「我が国」など第一人称の場合、「コピュラ」の表示率は非常に高い（合計23例、非表示率78%）。そのような例文には、「責任」が自分で持つというイメージが強い。

d. 新幹線網の拡大は、私たちも必要だと考える。

第三者のことを論じるとき、「責任の回避」の方策として、コンピュータが省略されている可能性がある（合計54例、非表示率50%）。書き手は政府の対応などに対する批判や意見を表明するとき、コンピュータを省略しない傾向もある（合計54例、表示率50%）。

e. ここまで徹底しなければ、食管制度の再生は不可能と考える。

f. それだけに政府のこれからの対応に、より厳しい世論の監視が必要だと考える。

③ 日本語学習者を指導するとき、文中に現れる「～と考える／考えられる」について、引用句のコンピュータを省略した方がいいと言えるだろう。文末に現れる「～と考える」について、引用内容が書き手の「判断内容」の場合、コンピュータを表示すると自分の主張が強く伝わる。引用内容が書き手の「思考内容」の場合で、かつ自分の主張をより柔らかく伝えたいとき、コンピュータを省略しても良いと言えるだろう。

以上は私の発表のレジюмеである。

今回の発表会から、色々勉強できた。特に論文の査読の時に頂いたコメントは論文の方向性の導きになり、自分にとってかけがえのない宝物となった。発表した時、日本語コーパス研究に関心を持つ日本語教育研究者が集まり、自分の調査経験をシェアでき、非常に嬉しかった。

今回の発表会の感想について、一番感じたのは「日本語教育の研究はいつも目の前にいる学習者を中心にしなければならない」である。マレーシアの日本語学習者は主に初級レベルの学習者であり、中級の学習者は少ない、上級の学習者は滅多にいない。そこで、マレーシアで一番盛んな日本語教育の研究テーマは初級日本語学習者向けの教育法である。このような日本語教育研究の発表は当地の日本語教師たちの目を非常に引いたようである。

今回、マレーシアの発表会で発表することによって、非常に成長できた。機会があれば、様々な地域の日本語教育学会に参加したいと思っている。

## 【5】半戸 文

シンポジウム日程

10月13日（土）

午前：開幕式、記念撮影、基調講演（大会報告）

午後：パネルセッション第1部×3会場、第2部×3会場

10月14日（日）

午前：パネルセッション第3部×3会場、第4部×3会場

午後：パネルセッション第5部×3会場、第6部×3会場、閉幕式

報告者は、10月14日（下線部）にて、「在中国日本租界における『芸妓』」について発表をおこなった。発表、質疑応答は、張亮先生（武漢大学）に通訳頂いた。

芸妓や花街は江戸時代に誕生したことから、近世以前の伝統的なイメージを持つ人も多いが、近代において大きな発展を遂げ特徴付けられたという事実はあまり知られていない。戦前の日本において芸妓は、地域の発展とともに需要が高まりその数を増加させていった。このため、芸妓の営業地域である「花街」も増加し、都市部から小規模町村に至るまであらゆる地域で営業を行っていた。

芸妓は、歌舞音曲を以て酒宴を取り持つことを職掌としている。芸妓は娼妓に似た労働契約形態であることから、公娼制度史や女性史の中で多く取り上げられて来たため、娼妓に類する存在として扱われやすい。しかし上記研究分野において、「芸妓」に関する事例研究は非常に少ない。そして実際の制度上でも、芸妓と娼妓は営業規則や鑑札が異なっていた。特に東京や大阪などの大都市においては、芸妓本人からも、利用者である客からも、芸妓と娼妓は異なる存在として認識されていた。

中国には、「妓女」と呼ばれる日本の芸妓と似た職業があり、倌人、花枯娘、交際花などとも呼ばれていた。妓女は書寓、長三、么三、么二、野鷄といった明確な階級構造に分かれており、例えるならばその上位は日本の芸妓、下位は娼妓に当てはめることができる。

本報告では、第一に、日本芸妓と花街、および中国人の芸妓についての基礎的な概説をおこない、第二に中国へ渡った日本人芸妓とその関係者が、租界においてどのような営業をおこなっていたのか、第三に日本人芸妓の営業が行われたことによって、既成の中国社会における中国人芸妓にどのような影響を与えたのかを明らかにして述べた。

租界での日本人芸妓の営業規則は、領事館警察によって定めされていた。領事館の管轄地域によって、その規則も異なり、租界ごとに芸妓の営業許可が下りた年度も異なっている。上海租界では1910年代に芸妓の営業許可が認められた。営業者数は、外務省通商局作

成の統計表から確認することができるが、内務省の統計と異なり、芸妓、娼妓、酌婦が合算されている為、厳密な数は定かではない。1910年代には約400名、1920年代には約500名が営業を行っていた。日本国内では、芸妓数は戦前まで増加の一途を辿るが、租界においては内地と同様の傾向は見られず年度によって増減が見られた。しかし、営業開始から戦前までの間、着実に営業者数は増加していった。日本内地とは異なる推移を示し、また租界という地は日本人芸妓を新たに増加させる場となっていったと考えられる。

日本人の商談や接待における慣習として、宴席に芸妓を呼び伝統芸能を鑑賞しながら客をもてなすことが広く行われていた。上海租界では、大手企業から個人規模まで、日本人の商業活動は盛んに行われており、役人らも多く在住していた。そのため、当初は中国人妓女を宴席に用いて、彼女達の演じる中国の歌や楽器演奏を鑑賞していたが、日本人芸妓の営業が許可されると共に日本人芸妓を重用するようになっていった。その理由として宴席での作法、自国文化への愛着、言葉などがあった。日本人芸妓の営業が認められたことにより、中国人妓女は仕事の機会が減少することになっていったと推測される。

残念ながら発表時においては、日本における史資料の調査と、日本語で執筆された先行研究の調査に留まっているため、上述した視点を十分に明らかにすることは出来なかった。日本芸妓が渡中して租界で営業を行い、中国の地域社会に影響を与えた一連の報告に関して、更なる史料調査と、中国側の史料を用いて明らかにしたいと考えている。

上記研究内容は、時間の都合上簡略化して発表した。発表会場では、涂文学先生（コーディネーター、江漢大学）、朱浚源先生（コメンテーター、台北中研院近史所）、李軍先生（魯東大学）、及び会場の参加者より以下の講評、質問を頂いた。①日本人芸妓と中国人妓女の比較研究を深める必要がある、②上海租界以外では他に何処を研究対象とするのか、③日本人芸妓の演じる芸能、接客（サービス）は具体的にどのようなものであるのか、④中国人妓女に関する統計の調査はあるのか、⑤客とは誰なのか（更に具体的に）、⑥本研究の限界は何年までなのか、⑦中国人妓女には階級があるが、日本人芸妓には階級があるのか、そしてその階級によって料金は異なるのか、上級の芸妓は下級芸妓より高いのか、⑧芸妓となる背景（動機）については先行研究があるのか、⑨租界で芸妓をしていた人物のインタビューを取ることは可能か、⑩芸妓営業が認められた年より以前から既に芸妓は租界にいたのではないのか、⑪日本の芸妓は中国以外の外国へは行ったのか、⑫戦前の日本人芸妓と娼妓はどのくらい違うのか、⑬報告者にとり芸妓は良い存在なのか悪い存在なのか。これらの講評、質問に対して、報告者の研究成果、調査中の事項に関しては現時点での見解を回答した。本シンポジウムで得られた中国・台湾側の研究視点を踏まえつつ、更なる研究を進めて論稿をまとめたいと考えている。



## 【6】早田 ひかり

### 今回調査対象の燉煌文書及び調査の必要性

燉煌文書とは、1899年以降中国燉煌の莫高窟より発掘された文書群の総称である。唐代以前の鈔本（写本）を大量に遺す点で、学術的価値は高いとされる。主な研究として、中国には姜亮夫氏の、我が国には神田喜一郎氏や池田温氏の研究がある。

現在文書の多くは、Bibliothèque nationale de France : BnF（フランス国立図書館）と The British Library（大英博物館）が所蔵する。これは、主に19世紀に各国の探検家によって現地から将来されたことに由来する。フランスでは Paul Pelliot（ポール・ペリオ）が、イギリスでは Marc Aurel Stein（マーク・オーレル・スタイン）が将来した文書群が代表的である。

現在文書の多くは、web アーカイブにて公開される。しかし、その閲覧方法及び内容は、十分に我が国に紹介されたとは言い難い。また、Pelliot 収集文書の中には、筆者が今年度より着手した研究の為には調査を必須とする『楚辭音』がある。

そこで、今回はフランス国立図書館にて上記の調査を行った。

### 調査内容

#### 閲覧と照会の流れ

調査予定日の3週間ほど前に、担当司書へメールにて照会の打診をした。担当者からは、燉煌文書に関する範囲を専門とする教員による紹介状と、既に web 上に公開されているにも関わらず、文書の現物を照会する必要性が真にあるか否かに対する説明を求められた。そこで、貴館にしか希望する文書が現存していない点と、現存実物でしか知り得ない情報（紙質・状態・紙背等）がある可能性がある点、そして翻刻では誤字脱字の可能性を排除できないため、論文の資料としては不十分である点等を説明した。加えて今回照会を希望する資料は博士論文の重要な一部となるため、調査には万全を期したい旨も伝えた。更に、指導教員である石本道明教授に紹介状（英文）を書いて頂き、先生の名刺と併せて PDF 形式で添付したところ、閲覧を許可して頂いた。

Paul Pelliot の燉煌文書は、現在 Richelieu（リシュリユー館）に所蔵される。パリ2区リシュリユー通りに面しており、当館は2010年より大規模改修中である。

始めに閲覧証の発行申請をする。受付では、パスポートと学生証の提示を求められた。

この他に、在籍証明書（本学自動発行機で発行できる、英文の証明書）も持参した。これは閲覧証発行に必要な情報を入力する際に役立ったため、極力持参すべきである。加えて、閲覧室入室・資料請求を円滑に行うためには、担当司書とのメールの文面も印刷の上持参したい。また燉煌文書は大変脆い文書であるため、撮影は禁止である。

## 調査対象と調査結果の詳細

今回照会した資料は、以下の2点である。

Pelliot Chinois 2494 『楚辭音』

Pelliot Chinois 2833 『文選音義』

燉煌文書は、糊張りされた硬めの麻布にくるまれて保管されていた。布を取ると、事前に担当司書より通達されていた通り非常に脆く薄い巻紙が姿を現した。その脆さといえば、文書に触れるごとにパリパリと音がするほどである。しかし、文書には丁寧な補修が施してあるため、極端に恐れる必要はなかった。一部分とはいえ、この様に現存することは驚異的と言わざるを得ない。

Pelliot Chinois 2494 『楚辭音』は、隋の釋道騫の撰とされる楚辭に関する文書である。文書の性格は、ひとまず注釈書としておく。釋道騫は、「楚聲」という独特の発声をもって楚辭を誦読した人物とされる。報告者は、古代の韻文である楚辭に対し、韻文を表現する特定の様式である「うた」が如何なる意義を持つかという問題に関心がある。そのため、釋道騫の著とされる『楚辭音』も十分に論究する必要があると考え、閲覧を希望した。

現存範囲は、楚辭「離騷」の一部分である。注はおおよそが音注であるが、明らかな語注も認められた。この他に、頭注・脚注と思われる書き入れもあった。また、文書を収納する際に、紙背にも書き入れ（下蔡者楚懸也其俗奢淫好哥謡）を発見した。後日確認したところ、紙背部分も web アーカイブにも画像化されていたものの、今回実際に照会しなければ見落としのままだったかもしれない。報告者にとっては、この点でも調査に来た意味があった。

Pelliot Chinois 2833 『文選音義』は、『楚辭音』と同類の著と思われたため併せて閲覧した。『楚辭音』に比べて損傷が激しく、文字が完全に脱落した箇所もあった。ただし、ここでの注は、例外なく音注である点が確認出来た。つまり同じ『音』と題する文書でも、注の性質には差異が認められたのである。

以上の事項を慎重に検討し、何らかの形で成果にしたい。

今回の調査の規模は、決して大規模とは言えない。しかし、現在取り組んでいる研究と

密接な関わりを持つだけでなく、特殊で価値のある文書に実際に触れられた経験は一生の財産となるであろう。

## 謝辞

最後に、調査旅費補助申請には林紅花氏及び大学院事務課の皆様に、英文でのメールのやり取りにおいては国際交流課の茂木奈津子氏に多大なるご助力を頂いた。また、文書閲覧を許可して下さった Département des Manuscrits Chargée des manuscrits de Dunhuang et des fonds chinois (東洋写本室燉煌資料担当司書) である Nathalie Monnet 氏と、同じく Département des Manuscrits Chargée des collections japonaises (東洋写本室日本資料担当司書) であり現地調査の際に親切な案内をして下さった Veronique Beranger 氏には大変な配慮をして頂いた。篤く感謝申し上げたい。Beranger 氏には、大変異例のことながら手づから資料をお持ち頂き、閲覧に関する説明までして頂いた。もし報告者が英語ないしはフランス語により通曉していたならば、氏に時間を割いて頂く必要もなかったであろう。慙愧の念に堪えない。

## 【7】田中 彩

### はじめに

報告者は、國學院大學大学院による平成30年度国際交流旅費補助を受けて9月3日～5日の2泊3日でシンガポールのナショナル・ギャラリー・シンガポール（National Gallery Singapore 以下、NGS）に調査に行かせていただく機会を得た。

当初の調査の目的は、他民族国家であるシンガポールの博物館における多言語対応ボランティアの取り組みについて学ぶというものであったが、渡航前の調べでナショナル・ミュージアムやNGSという国立の博物館が子供向けの教育プログラムに力を入れているように見受けられ、急遽調査内容を変更した。2泊3日という短い行程であったため調査先をNGSのみに絞り（これは発表者が美術に関心が高いからという私情を挟んだ結果である。）NGSで行われる家族連れ及び子どもを対象とする美術教育プログラムを見学・調査した。本報告ではその調査結果とそれを踏まえた今後の研究の展望について述べる。

### 1. NGSの概要

NGSは、高層ビルの立ち並ぶシンガポールの中心地であるシティエリアに2015年に開館した美術館である。

シンガポールと東南アジアのモダンアートをコレクションに持っている。

#### 1-1. 建築

建物は、旧最高裁判所の建物を用いた「Supreme Court Wing」と旧市庁舎の建物を用いた「City Hall」から成る。旧最高裁判所は、イギリス植民地時代の1939年に建設されシンガポールの代表的な西洋建築と位置付けられている。一方、旧市庁舎は、1945年に日本の降伏宣言を受け入れ、1965年にシンガポール建国の父である初代首相リー・クアンユー（Lee Kuan Yew）による独立宣言を受け入れた場所であり、まさにシンガポールの歴史的瞬間とともにあった建物であるといえる。

2005年、リー・シェンロン（Lee Hsien Loong）首相が2つの建物を改修し新しくナショナル・ギャラリーを作ると声明を出した。国際コンペで111のエントリーから選ばれたStudio Milouが設計を担当し、竹中工務店がSingapore Piling & civil Engineering PTE LTDとのジョイントベンチャーにより入札に参加した結果、主要建設請負業者に任命さ

れた。受注額は日本円で240億円であった。そうして2011年に着工し、4年後の2015年に開館を迎えた。NGSは、歴史的建造物に現代建築を取り入れたヘリテージと現代性とが巧妙に融合された建築物だといえるだろう。

## 1-2. 展示内容

展示室は地下1階から6階までである。Supreme Court Wingでは東南アジアのモダンアートを、City Hallではシンガポールのモダンアートの展示をしている。Special Exhibitionは、City Hallで行われている。

作品のスケッチは、22×28cm以下のスケッチブックに鉛筆を用いる場合のみ許可されている。

## 1-3. 利用案内

開館時間は、土曜日から木曜日が10時から19時、金曜日が10時から21時である。

料金は、シンガポール国民及び永住者はGeneral Admissionは無料、Special Exhibitionの観覧にはStandardが15シンガポールドル（2018年10月現在1シンガポールドルは約83.1円）、Concession（割引対象者）が10シンガポールドルかかる。シンガポール国民以外は、General AdmissionはStandardが20シンガポールドル、Concessionが15シンガポールドル、Special Exhibitionの観覧にはStandardが25シンガポールドル、Concessionが20シンガポールドルかかる。All Access Passはそれぞれ30シンガポールドルと25シンガポールドルである。

以下に当てはまる人はSpecial Exhibitionを含めたすべてを無料で利用できる

- ・ 6歳以下の子供
- ・ 地元の学生と教師
- ・ 障害者とその付き添い1名

HP等に記載はないものの発表者がICOM会員カードを提示したら上記の条件の人と同じくすべて無料で利用できたので、ICOM会員カードを持っているという条件も加えるべきであろう。

Concessionの対象となるのは、以下に当てはまる人である。

- ・ 7歳から12歳の子供
- ・ 60歳以上の高齢者
- ・ 留学生と海外から来た教師
- ・ 外国人を除く兵役者

独立記念日である8月9日にはすべての来場者が入場無料となる。

## 2. NGS の子供へのアプローチ

NGS の City Hall には、Keppel Centre for Art Education というインタラクティブかつ没入型の美術体験を提供するスペースがある。そのスペースと展示室内では様々な分野の芸術家との協力のもと作られた子供たちの好奇心を刺激し、想像力、創造性、自己探求を促す多様なプログラムが提供されている。期間限定のもの、週末のみと決まっているもの、毎日体験できるものといくつもプログラムがあるが、ここでは開催日の決められている常設プログラムと毎日参加できる常設プログラムを紹介する。

### 2-1. 開催日の決められている常設プログラム

#### 2-1-1. BOOK IN A NOOK

読み聞かせと、読み聞かせ者と聞き手の対話イベントである。月に一度3歳以上の子供とその保護者を対象に行われる。

#### 2-1-2. DROP-IN ACTIVITY

工作をするワークショップで、週末と祝日に4歳以上の子供とその保護者を対象に行われる。

#### 2-1-3. STORIES IN ART

展示室で作品を前に、プロのストーリーテラーによる物語を聞き想像とともに美術鑑賞を楽しむ体験である。毎週土曜日と日曜日に4歳以上の子供とその保護者が対象に開催され、ストーリーテラーと彼らは時に展示室の床に座り対話を行う。

#### 2-1-4. ART EXPLORERS

作品に関する新しい視点を得ることを目的に、文章によるガイドを用いたディスカッションを通じてアーティストとアート制作のプロセスについて学ぶ。毎週土曜日と日曜日に5歳から8歳の子供とその保護者を対象に開催される。

#### 2-1-5. FAMILY ART WORKSHOPS

アーティストの指導の下、一つの作品を作るワークショップ。7歳から12歳の子供とそ

の保護者を対象に開催される。これは有料である。

## 2-2. 毎日参加できる常設プログラム

ケッペルセンターと展示室の一部では年中無休で子供・家族連れだけではなく青少年の利用者を対象とした美術教育プログラムが提供されており、そこに彼らは、常に無料でアクセスすることができる。(外国人は別である。)

### 2-2-1. ART PLAYSCAPE

数々の賞を受賞しているシンガポールの若手アーティストである Tang Ling Nah の作品 (Wandaering in Black and White) である想像上のミニチュア都市空間で、光と影と音を楽しむ体験ができる。

### 2-2-2. ART CORRIDOR

シンガポールの著名な彫刻家 Han Sai Por の作品 (Tetrahedron-tetrahedron interpenetration:NGS 所蔵) に触発された色の万華鏡を体験し、独自の万華鏡を作製する。

### 2-2-3. CHILDREN'S MUSEUM

アーティストのスタジオを見学して、陶器の作り方を垣間見ることができる。インタラクティブ・ステーションでバーチャルで陶器作りが体験できる。5歳以上の人が対象。

### 2-2-4. CHILDREN'S MUSEUM WORKSHOP

基本の印刷工程を確認し、独自のプリントを作る。5歳以上の人が対象。

### 2-2-5. PROJECT GALLERY

シンガポールに本拠を置く Betty Susiarjo の作品 (The Blue Who Swims All This Way) の中で柔らかい彫刻に触り、岩にのぼり、光と色を楽しむアスレチックを体験できる。

### 2-2-6. デジタル・アーカイブ

City Hall Wing の1階と2階ではアーティストによる作品や収蔵作品をデジタルでみられる。

## 2-3. ファミリーガイド

子供に対する作品鑑賞の手助けのために、無料のプリントガイド、アプリもしくはサービスセンターでデバイスを借りることで聞けるオーディオツアーがある。

### 3. NGS とプログラムの特徴

報告者が館に入り一番に驚いたことは、就学前後の子供の数が非常に多かったことである。我が国においては美術館は、子供を連れては行き辛い場所であるという印象が強い。一方のNGSなぜこんなに子供が多いのかと思ったが、その疑問は館内を歩き回ってすぐに解消した。先述したCity Hall Wing 1階のケッペルセンターやSupreme Court Wing 1階のプレイングルーム等子供にとっての遊び場が非常に多いのである。子供たちは、自由にそれらのスペースで走り回っている。これらの場所は、シンガポール国民なら子供も大人も無料で利用できることが家族連れの利用を誘引していると考えられる。利用の敷居が高くなりがちな美術館に子供向けの遊び場・プログラムを設けることで美術鑑賞には関心のない人々をも取り込むことを可能にし、美術館及び美術鑑賞を国民に身近なものにしている。また、現役のアーティストがそこに関わることで美術館を拠点にアーティストと利用者が繋がる環境が作られている。

#### おわりに（今後の展望）

今回の調査は、館内の見学に終わったため、本報告の内容も館の概要とプログラムの紹介に留まってしまった。11月に再度NGSを訪問する予定であり、その際NGSのEducation Directorにインタビューをお願いしている。関係者の方へのインタビューによって、より詳細な調査結果を得られるであろう。また今回は、館内活動にのみ着目したが、学校との連携についても加えて調査を行いたい。

NGSの行う館内・館外での子供向けの美術教育プログラムがどのような教育効果を生むのか、どのような狙いをもってNGSは活動を行っているのかシンガポールの文化政策のあり方を踏まえて今後考察していきたい。



**【8】 國嶋 博子**

修士論文のテーマである「海外永住組の日本の子どもたちの日本語教育」を作成するにあたり、平成30年9月5日から11日にかけて、米国永住予定である日本語学習者と米国にある日本語補習授業校にて調査を実施したのでここに報告する。

まず、米国永住予定である日本語学習者とその母親に、日本語学習についてインタビューをしてわかったことをここにまとめる。母親は日本人であり、米国にて大学院留学をして以来、30年近く米国に住んでいる。韓国系アメリカ人であるご主人と結婚し、子どもは現在4人おり、長女22歳、次女20歳、長男17歳、次男15歳である。

母親が子どもに日本語を話せるよう努力したのは、将来日本語を使う機会があるかもしれない、他の子より楽に学べる環境がある、日本を好きであって欲しい、親族と話せるようになって欲しい、母からの贈り物である等の理由による。しかし、第一の理由は「子どもが反抗期を迎えた頃、母親として話し負けしないように、日本語での言い聞かせが理解できるようなレベルにしたかった」である。それを目標に日本語教育プロジェクトを組んでいた。当初は日本の高校を卒業した人程度のレベルを目標にしていたが、小学校卒業レベルの基本的な日常会話ができることが現実的であると感じ目標を変更した。次女は、自分の子どもにも日本語が話せるようになって欲しいので、結婚しても母親の近くに住み、子どもの頃に利用した日本語の絵本や文字カード等すべて捨てずに保管するように母親に依頼している。母親は孫に日本語を伝えることを強くは希望しておらず、好きにしたら良い程度に思っている。

この4人の子どもたちの日本語レベルは、長女次女はネイティブレベルであるが、長男は語彙力に欠けるが難しい言い回しでなければ理解でき、次男は長男のレベル同様であるがさらに語彙力が乏しい。4人にレベル差が生じたのはなぜか。4人はどんな環境で育ってきたのか。長女が生まれてから8年間は、父親は医師になりたてで多忙を極め家にいることがほとんどなく、シングルマザー状態だった。つまり、長女8歳、次女6歳、長男3歳、次男1歳の頃までは、家の中では日本語だけを学び話す機会に恵まれた状態だった。2歳からプレスクール（1日2時間／週2回）に入り、外で始めて英語に触れる機会を作った。5歳からは幼稚園（週5回）に通い、友人と英語で話す機会が増えるが、家では日本語だけの生活。読み書きは「ひらがなカード」を使い、本を読んで聞かせ、紙芝居等、手間暇をかけた。長女が4歳から小学校3年生になるまでは毎年夏に帰国し、日本の幼稚園や小学校に夏の2か月間だけ通っていた。長女次女にとっては良い思い出だが、長男次男は幼稚園の通い始めにいじめのようなものにあい、母親としては無理に通わせて日本を嫌いになって欲しくなかったもので、2年目以降は幼稚園や小学校に通わせることはなかった。

長女8歳次女6歳の頃、姉妹がアイススケートを始めることにより母親は忙しくなり、家での日本語教育ができなくなった。つまり、長男次男はそれぞれ3歳1歳の時点で家での日本語教育が終了したため、母親は長男次男の日本語教育プロジェクトを断念。また同時期に家にベビーシッターが入り、そのベビーシッターが英語話者だったため、長男次男は日本語より英語を話す機会が増えていった。長女次女の反抗期は日本語で対応できたが、長男14～16歳時はすべてに反抗的で英語でしか話さなかった。次男は14歳時の短い期間、親だけに反抗的であったが日本語は話していた。現在、母親と話す際、長女次女は日本語、次男は簡単なことは日本語で話すよう努力しているが難しくなると英語、長男は次男より日本語で話しかけるが姉には英語で話す。父親は日本語を話せないので家族の共通語は英語。父親は両親に韓国語を教わらなかったため韓国語を話せないことを残念に思っている。そのため、子どもが日本語を学ぶことに理解がある。

このように、4人の日本語レベルに差が出る結果となったのには理由がある。日本人である母親が、子どもたちの幼少期にどれだけ日本語を学び話す環境を与えられるかが重要である。

次にダラス日本語補習授業校を訪問してわかったことをここにまとめる。

まず、学校長に会い、ダラス日本語補習授業校の概要を伺った。文部科学省の支援の対象は、義務教育段階である小中学生で基本的には数年で帰国する予定の駐在員の子どもであるが、こちらの補習校は高校の部もある。また、国際部もあり現在50人程度の永住組の子どもたちを対象としているが、駐在組ときっちりと分かれているわけではない。文部科学省の支援の有無に関わらず、決められた支援の中で高校の部や国際部を含めたすべての要望に応えることはとても大変なことである。運動会の準備でお忙しい中、大変お世話になった。

国際部は可能在籍学年別に4クラスに分かれており、実際に国際Ⅲのクラス（中学生4人に高校生2人）の授業を見学させていただくことができた。日本語の本を読んで感想を発表する内容だった。授業内容はとくにカリキュラム化されているわけではなく、教師に一任されている。教師による一方的な授業ではなく、生徒が主体で話し合うことに重点を置いている点に共感が持てた。また、ご厚意で教壇に立たせていただくこともできた。家族のことや将来の夢、日本語を学ぶ理由、日本の何に興味があるのか等、生徒に質問をした。様々な家族構成の中、自分が日本人であることを感じ、米国にいる日本人の子どもたちが様々なことを考えて元気に過ごしている姿に、心から支援したいと強く感じた。

以上が、今回の米国訪問による調査報告である。今後の修士論文の作成に十分に役立つ調査ができた。

## 【9】孫 政政

本調査は博士論文作成のための調査である。

### 1. 調査の目的

本調査では中国語（南方方言）を母語とする日本語学習者を対象にし、日本語の清音と濁音の知覚印象の確認を行った。平成27年度提出の修士論文において、首都圏在住の中国語を母語とする日本語学習者93人の調査をした結果、中国の南方方言を母方言とする学習者と北方方言を母方言とする学習者において、差があった。また、中国の北方方言には有気音と無気音の対立があるのに対し、南方方言には有気音と無気音、有声音と無声音の対立がある。南方方言を母方言とする日本語学習者の日本語の清音と濁音の知覚について、母方言がどの程度干渉するか明らかにするのが本調査の目的である。南方方言の中国語話者は北方方言の中国語話者よりも清濁の習得が有利であることを明らかにしたい。

### 2. 調査の実施方法

本調査では、調査項目は全80項目である。音声はあらかじめ日本人の首都圏方言若年層の女性話者が調査項目を読み上げた音声を用意した。調査の前に、学生たちに調査についての目的と方法を説明し、その後、聞き取り調査を始めた。何れも教室にあるパソコンとスピーカーを使わせてもらい、音声をきかせた。

聞き取り調査終了後、回答用紙を回収した。その後、フェイスシート及び単語のなじみ度に関するアンケート用紙を配り、フェイスシートとアンケート用紙を回収した。

### 3. 調査項目について

いくつかの調査の狙いがあった。まず、音環境について、先行調査では、語頭での誤答率が非常に低かったため、今回の調査でそれを省いた。そして、語中、促音の後、撥音の後の音環境に応じ、項目を作成した。〔例：コメかミ、カッてニ、ヒンく（貧苦）等〕<sup>註1</sup>音環境による差を探るため、項目選定に関して次の観点を導入した。①ミニマルペアの語彙を追加した。なじみ度が高いと思われる単語について、語彙的な要素を避けるため、ミニマルペアとして項目に入れた。〔例：シャカイ・シャガイ等〕②母音の無声化との関係を見るため、無声化する拍を含む項目を追加した。〔例：アキタケン、カチキ、ハクサイ等〕③

学習者にとって混乱しやすいと思われる単語を項目に入れた。〔例：アダプター、ハシッコ等〕

注1：調査対象の拍はひらがなで示す。

#### 4. 被調査者について

修士論文の調査では被調査者の学習歴と経歴が不揃いであったため、調査結果に明瞭な傾向がみられないことが明らかになった。また、清濁の認識率の要因の決定に課題が残った。そこで、今回の被調査者は大学の日本語専攻の学生とした。被調査者の年齢、日本語の学習歴などが明らかであるため、属性を揃えた調査が可能と考えられる。

#### 5. 地域差について

中国の南方方言の1つである閩南（ビンナン）語話者を調査対象とするため、調査地点を選んだ。南台科技大学は台湾の南部の台南にある。台南は閩南語が主に使用される地域である。そして大学生たちはほぼ台湾出身で、閩南語が使用言語である。ただし、中には閩南語を理解するが、使用はしない学生も含まれる。一方、厦門大学は中国の南方の厦門（アモイ）にある。厦門も閩南語を主に使用する地域である。しかし、今回の調査では、厦門大学は総合大学であり、学生は全国から集っているため、被調査者の学生たちが全員閩南語を使用すると限らない。しかし全体として閩南語話者及び南方方言話者が多かった。

#### 6. 調査人数

南台科技大学では297人、厦門大学では67人、合計364人の調査を行った。

#### 7. 調査のスケジュール

##### 2018年12月16日

出発 東京成田 CX451便台北桃園行き、台湾時間21：00着。

その後、空港から地下鉄に乗り、高鉄桃園駅で新幹線に乗り換え、台南に向かった。

台湾時間約23：30頃、高鉄台南駅に到着し、23：59分発の汽車に乗り換え、約24：30分頃台南駅に着いた。ほぼ25：00時にチェックイン、ホテルで宿泊。

##### 2018年12月17日

朝、南台科技大学に移動。

9：40分台湾科技大学応用日語系の N302室で、神作晋一先生と調査の打ち合わせ。

10：10-11：00 T0210教室で4年生クラスを調査 人数：32人（陳淑女先生）<sup>注2</sup>

11：10-12：00 T0103教室で一年生Cクラス<sup>注3</sup>を調査 人数：28人（神作晋一先生）

注2：（ ）は指導教員名、以下同じ。

注3：学生の日本語能力についてはA～Dクラスがあり、Dが同学年の中で最もよくできるクラスである。ただし、選択授業についてクラス分けはない。

午後、調査表を整理し、音声ファイルの改善を行った。

18：00頃大学に移動し、夜間部に向けて調査の準備をした。

19：05-19：50 I0306教室で夜間部1年生Aクラスを調査 人数：46人（陳亭希先生）

20：30-21：30 T0308教室で夜間部1年生Bクラスを調査 人数：29人（駱昭吟先生）

反省点：①初日の調査で、教室に本来備えてある器材に不慣れで、器材の準備と調整に時間がかかった。②音声ファイルの音量が十分でなく、午前中の調査で音量を最大化に上げるために時間もかかった。午後出力の大きいスピーカーを新たに買い、ホテルに戻り音量を試したが、結局音声ファイル自体の問題であることが判明した。夕方のために、急いで対応して音声ファイル自体の音量を3倍に拡大した。③夜間部の調査で音量を3倍拡大した音声ファイルは音声の質がやや劣化していることが分かった。

## 2018年12月18日

午前、もう一度音声ファイルを改善し、午後の調査の準備をした。

13：50-14：40 T0001教室で2年生Bクラスを調査 人数：26人（楊琇媚先生）

14：50-15：40 T0407教室で2年生Cクラスを調査 人数：33人（黃郁芳先生）

15：50-15：40 N305教室で3年生Cクラスを調査 人数：34人（楊琇媚先生）

その後、次の調査までの時間に、調査の準備をした。

20：00-20：45 T0312教室で夜間部4年生クラスを調査 人数：29人（陳淑女先生）

20：45-21：30 T0311教室で夜間部3年生クラスを調査 人数：40人（楊琇媚先生）

調査後、先生方に挨拶をし、ホテルに戻り、これで台湾での調査は以上である。南台科技大学で二日間の調査を合わせて合計297人の調査ができた。

反省点：二度改良した音声ファイルは音質が落ちずに音量を3倍に拡大し、調査では使いやすいかった。教室に備えてある設備を今回使わせてもらったが、良質の音質と設備の調整時間を節約するため、今後の調査で使いやすい機材の持参などを考えるべきである。

## 2018年12月19日

朝10：00チェックアウトし、台南空港に向かった。

13:45分のCI7863便香港行きに乗り、およそ16:00香港に到着。香港でトランジットし、17:50分のCA600便で廈門に向かった。北京時間約20:00に廈門空港に到着した。その後ホテルに移動し、宿泊。

### 2018年12月20日

朝8:00頃バスでホテルから廈門大学に向かい、9:10分に廈門大学の西門で任星先生<sup>注4</sup>と待ち合わせ、その後打ち合わせをしてから教室で調査を始めた。

注4: 任星先生は日本明海大学大学院応用言語学研究科博士後期課程修了、応用言語学博士である。

現在、廈門大学外文学院の副教授であり、専門は応用言語学・音声学・日本語教育である。

9:40-10:10 廈門大学「基金棟」にて2年生の2クラス分を調査 人数:38人

その後、午後の調査について任先生と打ち合わせをし、午後の調査に向けて準備をした。

16:10-16:30 「基金棟」503教室で3年生の2クラスおよび大学院生 人数:29人

廈門大学では授業の時間ではなく、その合間を使って調査をしたため、聞き取り調査を先に行い、調査表を回収した。フェイスシートおよび単語の馴染み度についてのアンケート調査は学生たちに持ち帰って回答してもらった。

その間教室で任先生と日本語の音声学および孫の博士論文の研究や調査、中国の大学における日本語教育の現状などについて、議論を交わした。さらに、研究室で大学院生の解答用紙を回収した。そこで、任先生から任先生の博士論文のご著書を頂いた。その後、先生にご挨拶をし、廈門大学での調査が終了。

### 2018年12月21日

調査表の確認と資料の整理を行い、全364人文の調査票とフェイスシート及びアンケートを確認した。

### 2018年12月22日

朝10:00廈門空港へ向かい、12:15分廈門発香港行きのCX5619便に乗り、約14:00に香港空港に到着。香港でトランジットし、15:20分香港発東京成田行きのCX500に乗り帰国。日本時間夜20:30頃に成田空港に到着。

## 謝辞

今回の調査は國學院大學大学院国際交流旅費の補助を頂いた。國學院大學大学院に大変感謝致します。そして指導教官である久野マリ子先生、南台科技大学の神作晋一先生、陳淑女先生、陳亭希先生、駱昭吟先生、楊琇媚先生、黃郁芳先生、及び廈門大学の任星先生に大変お世話になり、深くお礼を申し上げます。